夏目漱石『三四郎』

次の駅で汽車がとまった時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言いだした。一人では気味が悪いからと言って、しきりに頼む。三四郎ももっともだと思った。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかった。なにしろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇したにはしたが、断然断る勇気も出なかったので、まあいいかげんな生返事をしていた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

＜中　略＞

九時半に着くべき汽車が四十分ほど遅れたのだから、もう十時はまわっている。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口のようににぎやかだ。宿屋も目の前に二、三軒ある。ただ三四郎にはちとりっぱすぎるように思われた。そこで電気燈のついている三階作りの前をすまして通り越して、ぶらぶら歩いて行った。むろん不案内の土地だからどこへ出るかわからない。ただ暗い方へ行った。女はなんともいわずについて来る。すると比較的寂しい横町の角から二軒目に御宿という看板が見え

た。これは三四郎にも女にも相応なきたない看板であった。三四郎はちょっと振り返って、一口女にどうですと相談したが、女は結構だというんで、思いきってずっとはいった。上がり口で二人連れではないと断るはずのところを、いらっしゃい、――どうぞお上がり――御案内――梅の四番などとのべつにしゃべられたので、やむをえず無言のまま二人とも梅の四番へ通されてしまった。

下女が茶を持って来るあいだ二人はぼんやり向かい合ってすわっていた。下女が茶を持って来て、お風呂をと言った時は、もうこの婦人は自分の連れではないと断るだけの勇気が出なかった。そこで手ぬぐいをぶら下げて、お先へと挨拶をして、風呂場へ出て行った。風呂場は廊下の突き当りで便所の隣にあった。薄暗くって、だいぶ不潔のようである。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考えた。こいつはやっかいだとじゃぶじゃぶやっていると、廊下に足音がする。だれか便所へはいった様子である。やがて出て来た。手を洗う。それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、

「いえ、たくさんです」と断った。しかし女は出ていかない。かえってはいって来た。そうして帯を解きだした。三四郎といっしょに湯を使う気とみえる。べつに恥かしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽を飛び出した。そこそこにからだをふいて座敷へ帰って、座蒲団の上にすわって、少なからず驚いていると、下女が宿帳を持って来た。

＜中　略＞

そこへ下女が床をのべに来る。広い蒲団を一枚しか持って来ないから、床は二つ敷かなくてはいけないと言うと、部屋が狭いとか、蚊帳が狭いとか言ってらちがあかない。めんどうがるようにもみえる。しまいにはただいま番頭がちょっと出ましたから、帰ったら聞いて持ってまいりましょうと言って、頑固に一枚の蒲団を蚊帳いっぱいに敷いて出て行った。

それから、しばらくすると女が帰って来た。どうもおそくなりましてと言う。蚊帳の影で何かしているうちに、がらんがらんという音がした。子供にみやげの玩具が鳴ったに違いない。女はやがて風呂敷包みをもとのとおりに結んだとみえる。蚊帳の向こうで「お先へ」と言う声がした。三四郎はただ「はあ」と答え

たままで、敷居に尻を乗せて、団扇を使っていた。いっそこのままで夜を明かしてしまおうかとも思った。けれども蚊がぶんぶん来る。外ではとてもしのぎきれない。三四郎はついと立って、鞄の中から、キャラコのシャツとズボン下を出して、それを素肌へ着けて、その上から紺の兵児帯を締めた。それから西洋手拭を二筋持ったまま蚊帳の中へはいった。女は蒲団の向こうのすみでまだ団扇を動かしている。

「失礼ですが、私は癇症でひとの蒲団に寝るのがいやだから……少し蚤よけの工夫をやるから御免なさい」

三四郎はこんなことを言って、あらかじめ、敷いてある敷布シートの余っている端を女の寝ている方へ向けてぐるぐる巻きだした。そうして蒲団のまん中に白い長い仕切りをこしらえた。女は向こうへ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかった。女は一言も口をきかなかった。女も壁を向いたままじっとして動かなかった。

夜はようよう明けた。顔を洗って膳に向かった時、女はにこり

と笑(わら)って、「ゆうべは蚤(のみ)は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、ありがとう、おかげさまで」というようなことをまじめに答えながら、下を向いて、お猪口(ちょく)の葡萄豆(ぶどうまめ)をしきりに突(つ)っつきだした。

勘定(かんじょう)をして宿を出て、停車場(ステーション)へ着いた時、女ははじめて関西線(かんさいせん)で四日市(よっかいち)の方へ行くのだということを三四郎に話した。三四郎の汽車はまもなく来た。時間のつごうで女は少し待ち合わせることとなった。改札場(かいさつじょう)のきわまで送って来た女は、

「いろいろごやっかいになりまして、……ではごきげんよう」と丁寧(ていねい)にお辞儀(じぎ)をした。三四郎は鞄(かばん)と傘(かさ)を片手(かたて)に持ったまま、あいた手で例の古帽子(ふるぼうし)を取って、ただ一言(ひとこと)、

「さよなら」と言った。女はその顔をじっとながめていた、

が、やがておちついた調子(ちょうし)で、

「あなたはよっぽど度胸(どきょう)のないかたですね」と言って、にやりと笑(わら)った。

【解説】『三四郎』冒頭の名古屋の件抜粋。大学入学のため九州から汽車で上京する小川三四郎は、好みのタイプの人妻（子持ちで夫は大連に出稼ぎ中）と京都で相乗りになる。三四郎が車窓から放った駅弁ゴミが、その女の額を汚したのが縁で、会話するようになる。

出典…青空文庫を転載し、ルビを振りました。発出は明治四一（一九〇八）年九～一二月朝日新聞。

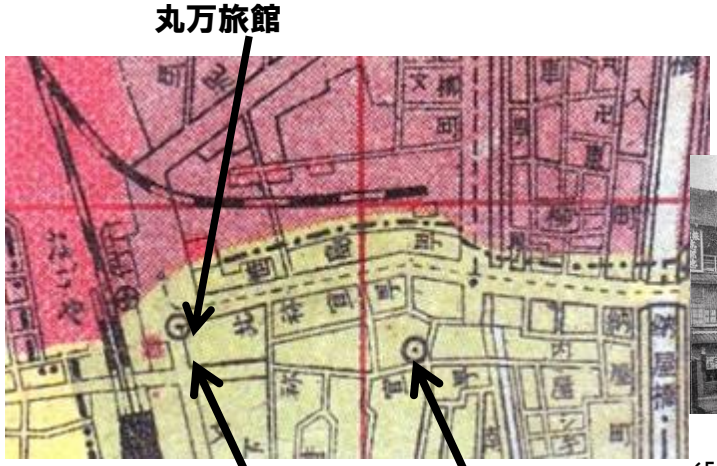
夏目漱石：慶応三（一八六七）年～大正五（一九一六）年　明治の文豪。代表作『吾輩は猫である』『坊ちゃん』『草枕』『こころ』ほか

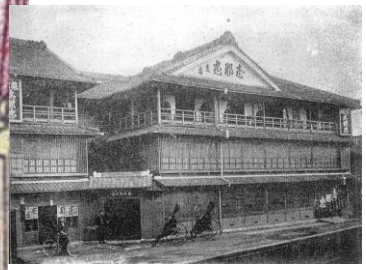
三四郎ゆかりの宿の碑

現中村区名駅南一丁目十八番六号の、「角屋」跡地にある。明治の頃は広小路通笹島町電停前にあり、道路拡幅でここに移転した。なお、現在では、角屋はモデルではなく、三四郎の宿は漱石の想像の産物と見るのが一般的。（参考『中村区の歴史』横地清 愛知県郷土資料刊行会 一九八三年 『名古屋の駅の物語[下]』大野一英 中日新聞本社 一九八〇年ほか）

三四郎連載の頃の漱石
明治 41 年 12 月満 41 歳
（『漱石の思ひ出』夏目鏡子著 改造社 1928 年より）

明治 42 年頃の名古屋駅（上）と周辺地図（下）





志那忠 大正 2 年頃
（「名古屋商工案内」1913 年より）

乃木将軍贔屓の志那忠　三四郎ゆかりの宿の碑
（上２枚「府縣聯合共進會記念 名古屋現勢地図」名古屋新聞社編輯局 1910 年より）